

濃尾平野と川の流れについて

熊澤 良嗣 調

水と人々の生活とは切っても切れない関係がある。集落や砦（城）のそばには飲み水を得るための川や自然の泉があったはずである。日本の農村は川の近くに生まれ、その沿岸域は稲作をおこなうための水田へと変貌していった。

水道がなく井戸水に頼っていた昔は、家庭から出る排水は微々たるもので、すべて庭先で処分され農業用水路まで流れ込むことはなかった。村の脇を流れる用水路の水は飲料用にもなるきれいな水で用水と呼ばれ、収穫を控えた田からの排水や豪雨などの緊急に排出すべき増水は悪水と呼ばれ、そのための水路は悪水路と呼び分けていた。

ちなみに現在の農業用・工業用の水は、昭和半ばに国営事業として地中に埋設された配水管を通して、延々と木曽川から送られてきている。

濃尾平野 尾張平野という人もいるが、美濃の濃と尾張の尾が使われていることを想像したい は東北に高く西南に低い地形であるから水は当然それに合わせて流れる。犬山で谷間を抜け平野に出る木曽川にそういった特徴が著しい。

木曽川に現在のような堤防がなかったころ、つまり自然堤防しかなかった400年以上前のころ、木曽川の流れはどのようになっていたのだろうか。

地球探査用のランドサット衛星のデータ分析から地下水脈（旧河道）を読んだり、グーグル地図の航空写真から、蛇行する河川とその沿岸の水田域を観察するなどの探求方法がある。また最近公開されたが、南山大学が文科省の指定を受けておこなった歴史環境情報基盤研究の一環で、戦前に米軍が撮影した濃尾平野の航空写真を編集したもの インタ

ーネットで閲覧可能 などからも過去の河道を推測することができる。

あるいは、江戸時代の検地などのときに描かれた絵地図（村絵図）によっても、おおよその河川の所在は確認できる。こういった貴重な絵図も、インターネットでよく調べれば大学や公立図書館のホームページに公開されているのを発見することができる。

下は宮田用水史などにあった図をもとに作成したものであるが、ここに描かれている川筋は、木曾川にとって史上最大であったとされる1586年（天正14年）6月24日の大洪水以前ののものである。

この大洪水によって木曾川の流れがほぼ現在のものになった——青色で着色した部分——といわれるが、それ以前の木曾川の主流の1つは、上から左下端へと描かれている木曾川 境川とも呼ばれ美濃国と尾張国の境界であった ともう1つは、図中の三之枝で
ある日光川（萩原川）であったといわれる。



天下取りなつた家康の命令によつて犬山から木曾川河口までの御園堤^{おかのいつづみ}が築かれたのは1608年であるが、これによつて図中の一之枝・二之枝・三之枝などの派川^{はせん}への木曾川からの流れが遮断されることになつた。木曾川の伏流水が吹き出す清水^{かぜきこ}や河跡湖は各所に散在したが、水不足は農業ばかりか人々の生活にも重大な影響を及ぼすので、徳川幕府と尾張藩はすぐに対策に取りかかつた。

1608年に大野に杣^い(取水口) 本来は垵という字、愛知では杣を使う を造つて大江用水に配水した。また同年、般若杣も着工している。その後大野での取水が難しくなつて、1628年に宮田に杣(西杣)を造つて大江用水に配水し、更に1642年には東杣を増築して配水している。1645年には木津用水の開削を始め、1650年には木津杣が完成、通水している。

般若杣は1619年に完成したが、地形上木曾川の強い流れが直撃し破壊されることが多く、1740年には遂に廃止となつてしまつた。その後、般若杣から得ていた水は、木津まで堀を延長開削して木津杣から取水するようになった。

さて新般若用水が開削されたのは1790年であるから、これらよりも大分後のことである。

上述のように般若杣からの取水ができなくなり、般若川の水量が不足するようになったため、宮田から時之島の牛洗^{うしあらい}のあたりまで新たに堀を開削し、般若川——図では三宅川の上流部——に導水したのである。牛洗以後の般若川は新般若用水とともに南下し、丹陽町三ツ井あたりで青木川に合流する。水の大部は新般若からのものなので、宮田からこの合流点までを新般若用水と呼称するようになった。